

## コミュニケーション・アゴラ

司会 黒川 貞生 (東京大学大学院)

コミュニケーション・アゴラでは以下の3人の演者により行なわれた。

1. バレーボールに関する情報収集と情報交換  
ーインターネットの活用ー
2. 本当にこのままでバレーボールはよいのだろうか
3. バレーボールの練習方法の工夫

後藤 浩史 (愛知産業大学)

藤生 栄一郎 (筑波大学付属高校)

遠藤 俊郎 (山梨大学)

「アゴラ」の由来は、ギリシャ語で集会などという意味で、自由なディスカッションが行なわれるのが本来の姿である。しかし、当日は時間に制約があり、まだ「アゴラ」というものに私たち研究会会員がなれていないためか、数人の発言者は出たものの熱い演者の投げかけに対して、全体としての積極的なディスカッションに至らなかった。

今後、「アゴラ」の形態に私たちが慣れ、より活発なディスカッションが行なわれるようになれば、当研究会において、自由な意見、奇抜なアイデアによる良い発想を産む場となるであろう。最後に、発表された方の抄録を掲載し報告と致します。  
(編集委員 高橋 宏文)

### バレーボールに関する情報収集と情報交換

#### ーインターネットの活用ー

後藤 浩史 (愛知産業大学)

キーワード：インターネット・電子メール・情報収集

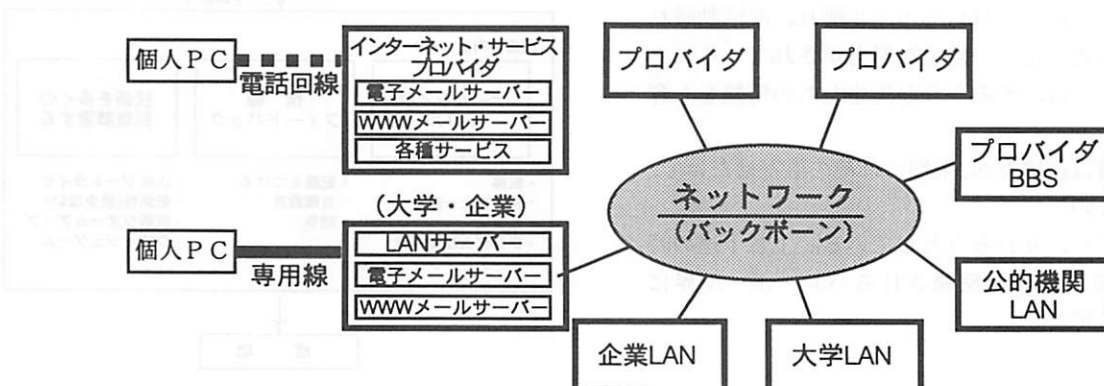
緒言：昨今のインターネットの普及は、学校、会社を問わず、多くの組織で取り入れられ、数年前の、ほんの少しのマニアだけが使うものという印象は薄れてきている。最新のパソコンには、インターネットを利用するための様々なツール(ソフト・ハード)が標準で付属し、建前的には、パソコンを購入すれば、すぐにでもインターネットを利用できる印象すらある。

今後、パソコン自体の低価格化、学校教育におけるパソコン教育の導入等によって、情報通信機器としてのパソコン利用者が増加し、それに伴って、インターネットを利用する通信インフラの整備も急速に進むことが予測される。

バレーボール研究会におけるアンケート調査でも、パソコンやインターネットを通じた情報収集には興味があり、パソコンをインターネットを通じた情報収集や、自チーム・相手チームの分析に利用してみたいとこたえた方が多く見られた。

内容：郵便や電話、FAXにかわるコミュニケーション手段としての電子メール、新しいメディアとして大量の情報が流れるホームページの概要を説明するとともに、バレー研究会およびバレーボールに関するインターネット利用の現況について報告する。

1. インターネットの仕組み・概要
2. バレーボールに関するインターネットを利用したコミュニケーション
  - 1) ホームページ：著名な検索システムである yahoo に登録されている国内のホームページ(以下HP)の数は74件である。JVAを筆頭に企業チームの公式HP、ファンクラブのHP、個人のHP等が中心である。
  - 2) メーリングリスト：現在、公開されているのが確認できているメーリングリストは2件存在する。



### 3. バレー研究会のインターネット関連の取り組み

現在、研究会としてHPを開設し、情報の公開やインターネットを利用したサービスを模索している。その主な内容は、①研究集会の告知・報告、②バレーボール関連研究文献リストの公開、③研究会会員のHPリンク、④バレーボール関連のHPリンク、⑤電子メールによる研究会会員の連絡網の整備、⑥バレーボールメーリングリストサービス、⑦掲示板の設置等である。

#### 本当にこのままでバレーボールはよいのだろうか？

藤生栄一郎（筑波大学附属高校）

ここ数年、バレーボール人気が低迷しているといわれる。中学、高校ではバレーボールの人気だけでなく、部活動自体が低迷している。しかしそのような状況の中で、多くの指導者達は中高生を相手によく頑張っていると思う。ところが、このところ、「指導者もバレーボール離れ」のおそれが感じられる。度重なるルール改正に、当然のことながら「バレーボールの先生」が本業でない教員は、大いに戸惑っている。

この春から行われる「25点ラリーポイント制」には、ほとんどの中高の指導者が疑問を感じている。「TV放映があるわけでもないのになぜあのように変えるのだ？」これまでも行われた様々なルール改正も、すべてがいきなり上から降ってくるものだった。末端の指導者の考えなど、お構いなしのようなのである。

時を同じくして、この春から登録費が値上げされた。理由は「全日本の強化費」である。それは大いに結構。ただし、部員数の少ない学校は登録をためらう可能性もある。末端のチームは、日本協会に1万円もの登録費を支払い、何を期待すればいいのか。昨年までの倍以上の金額への値上げにもかかわらず、そこで行われるバレーボールのルールは、自分達や生徒達の願っているものではないのである。「登録しないと試合ができない。」実はそんなことはない。多くの学校に声を掛けて自主運営すればよい。そもそも全日本レベルの大会には大多数の学校は全く関係ないのだ。

バレーボール界は、どんどん自分の首を締めているようにしか思えない。底辺で、バレーボール離れ、部活動離れの中、情熱のある先生たちの地道な努力がされているにもかかわらず、現状では、そのような先生たちの情熱をも奪い兼ねない。

全日本の強化費は結構だが、末端にはその皺寄せだけで、何等サービスはない。

政治の世界ですら、変わろうとしている。上意下達の時代は終わっている。民意の反映されるバレーボール界になっていくことを望む。

### バレーボール練習法の工夫 ～運動学習諸理論を応用して～ 遠藤 俊郎（山梨大学）

キーワード：バレーボール、練習法、運動学習諸理論、Carl McGown

選手たちが日々練習している目的は、当然バレーボールの様々な技術の向上、うまくなることにあることは言うまでもない。このことは、言い換えると、バレーボールの運動プログラムを形成することに他ならない。したがって、この運動プログラムを効果的に発達させるには、練習に際し運動学習の諸理論を適用させることが肝要である。これについて、本報告者らは現在の我が国における指導法がどの程度運動学習諸理論と合致しているかを関東レベルと県レベルの高校チームの指導者に調査したところ（龍山他、1999）、競技レベルの高いチームの指導者の方が運動学習理論から見ると合致した練習をしていることが分かった。しかし、十分に適用されているかという点とまだまだ不足している点があったり、結果として運動学習理論と合致しただけで指導者がそれを理解し意識して練習計画を組み立てているかという点に関しては、確信が持てないのが現状であった。

そこで、ここでは運動学習理論に裏付けられたバレーボールの練習法を実践している Carl McGown (1998) の著「バレーボールコーチングの科学」（ベースボールマガジン社）を参考に理論と実践が調査された練習法を模索し、これまでの我が国の練習法に新たな工夫の導入を期待したい。

図1は Carl McGown が示したバレーボール技術に関する運動学習のモデルである。まず、練習の第1段階には、目標を提示することによる「動機づけ」がある。これには、如何に選手にイメージを持たせるかという「示範」と注意を向けるべき「手がかり」の提示が関係している。さらに、実際の練習段階では運動プログラムの発達や反応の向上の

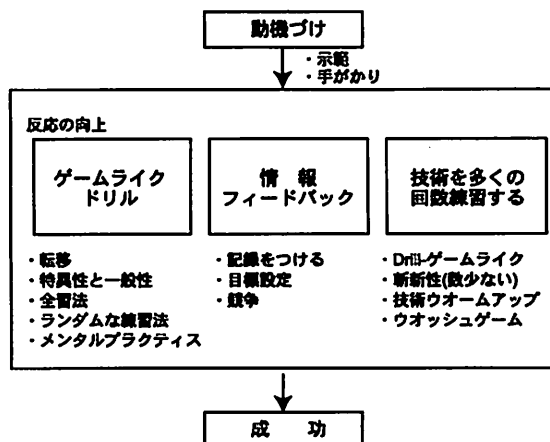
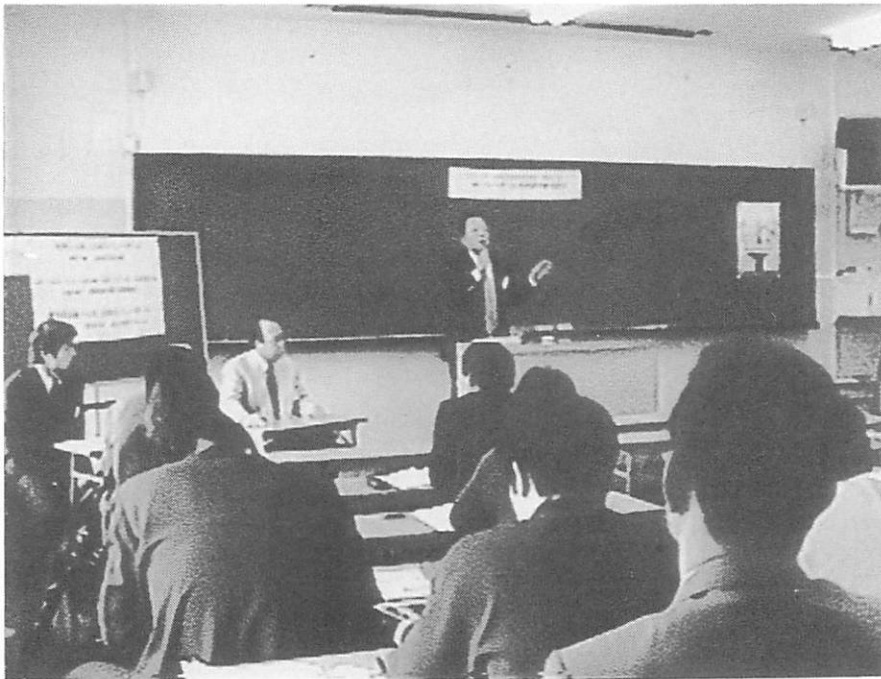


図1 学習のモデル

ために、まず「ゲームライクドリル」を考慮する必要がある。これには、運動の特異性や転移の問題、全習法やランダムな練習法の重要性、メンタルプラクティス等が問題となる。また、「数多くの反応回数」を得るためには、ドリルの工夫や漸進性の工夫、技術ウォームアップやウォッシュゲーム等の利用を考慮する必要がある。さらに、様々な反応後に得られる「情報フィードバック」に関しては、記録等の管理により具体的な目標を設定したり、競争的状况を設定することが可能になってくる。このような諸側面を考

慮し、適切なレベルの困難さでできるだけ多くの回数技術練習する場を稼ぐことが最終的な成功（単に順位ということではなく、如何にうまくいったかという観点で）に結びついていくものと思われる。指導者の中には、このようなこと全て考慮して練習場面を設定することは不可能であると思うかもしれない。しかし、試みのないところに新たな前進は無いと報告者は考える。まずはこれまでの練習法に関する再考のきっかけとなれば本報告の目的の一部は達成されたと思われる。



シンポジウム風景 (1999年3月21日 於早稲田大学) 左から加藤氏, 前田氏, 小島氏